

前回は仕事の愚痴ばかりきかせたので、今回はぐつとアカデミックに「SFの歴史」ということで……と意気込んで書きだそうとしたが、待てよ、俺はSFの歴史なんか知ってたか？ と思い、手がとまった。考えてみれば、SFは好きで、昔はよく読んだけど、歴史なんか考えたこともない。しかも、最近ではまるでごぶさたである。最後にまともなSFを読んだのはいつだろう。たぶん、アグネス・チャン……じゃないテッド・チャンとやらの短編集か、グレッグ・イーガンとやらの題名を覚えていない作品か、ソウヤーのなんたらかんたらというやつか……うーん、とても「SFファン」というにはほど遠い状態である。こんな人間に、果たして「SFの歴史」など語れるのか。

むりむり。

というわけで、まずは知識を仕入れなければと、本棚から「SF教室」(筒井康隆編・ポプラ社)をとりだした。実はこれ、たいへんな本なのである。私は小学生のある日、ふとSFに目覚めたものの、周囲にSFに詳しいひとはいなかった。

SFに関する知識に飢えていた私は、学校の図書室に行き、いろいろ探したすえにこの本に行き当たったのだ。早速読むと、知らないことばかり。これなるかなと熟読したが、それだけではおさまらない。自分のものにしたくて、大きな書店に行ってみたものの、見つからなかった。当時はたぶん、増刷と増刷のときまで入手困難だったのだ。しかたなく私は、

「世界の名作」という項目をノートに筆写した。つぎに「外国の作家」という項目もノートに写した。ついでだからと、「日本の名作」、「日本の作家」の項も書き写した。ここまできたら、ええい、ままよ……というわけで、「SFのマンガと映画」という項目以外の全てをノートに筆写したのである。たいへんな時間と労力がかかったが、SFの世界の入り口に立った少年にとっては、そういう書き写す作業自体を通して、自分のなかにSFの知識が染みこんでくるような気がして、とても楽しかったのである。ものすごく汚い字で書いてあるそのノートはしばらく大事に活用していたが、たしか高校生の頃、「SF教室」を無事入手することができ、お役ご免になった（捨てた、ということですよ）。今にして思えば、置いておけば読み返して笑えたのだ。その後、中学に入った私は同じ轍を踏み、福島正美の「新版・SFの世界」というのを図書室で借りて筆写した。そのまま筆写を続けていれば、後年、毎日、般若心経を百回写経する男として有名になったかもしれないが、その二冊でやめてしまった。というのは、中学に入ると、古本屋を活用するすべを知ることとなり、新刊書で入手できない本を古書店で手に入れるようになったからである。

えーと、何の話だったっけ。そうそう、「SF教室」だ。

今は絶版なのかなあ。とにかく、今回の稿を書くために、久しぶりに読み返したのだが、ある意味、ものすごくおもしろい。なにしろ、昭和四十六年の出版なので、今から三十四年まえの情報が最新情報として掲載されているのだ。日本のSF作家として十二人が取り上げられているが、すでに四名が物故者となっている。しかし、今回、読み返してわかったのだが、私のSFに対する知識というのは、いまだにこの本の内容のまま止まっているのだ。たいへん困ったことではあ

るが、実は、書く分にはそれほど不自由しないとも言える（ええんか、そんなことぞ）。

では、「SF教室」の内容を皆さんに紹介していこう。最初に、筒井康隆による「SFとはなにか？」という項がある。冒頭部を引用させていただこう。

SFとはいったい、なんだろう？ 車の名前のこと？ そうじゃない。あれは、まねをしているのだ。

もう、この時点で意味がわからない。SFという車の名前って何？ 冒頭の一行目が理解できないようでは、この本をとうてい読みこなすことはできまい。ああ、SFって深そうだ……とあきらめてしまっただけじゃない。気を取り直して先を読みすすめよう。

SFとはなにか その答えは、すでにSFを読んでいる人が十人いるとすれば、十人ともちがうのだ。百人いれば、百人とも答がちがう。

SF作家だって、同じ答えをする人はぜったいにいないだろう。

だから、もしきみたちが、ぼくの答えだけ読んだところで、それは何の役にもたたないのだ。

だれにも通用しないのだ。

SFとはなにか？

そう。それをきめるのは、きみ自身だ！

あるいは、いつまでたっても、答えがきまらないかもしれない。ない。

それなら、いつまでも、答えをさがし続けていればいいのである。

ええい！ ほんとうのことをいってしまおう！
ほんとは、ぼくだって、まだ手さぐりしているのだ。

なるほどなあ。」 教室」というタイプの入門書の冒頭に、いきなりこんなことをかまされたら、たいていの読者はわけがわからなくなるだろう。日本ではSFの定義についていろいろやかましいし、「これは俺的にはSFではない」とか言ってるひとも多いが、SFというものを非常に個人的に見る、というか、百人いれば百とおりのSF観がある、みたいな認識というのは、「SF教室」のこの筒井さんのイントロダクションが当時のSF少年に深い影響を与えた結果ではないか、と思えるほどだ（その可能性はけっこう高いような気がする）。もう少し引用する。

（未来予測的でない、ニュー・ウエーヴとかのことに触れたあと）さあ、わからなくなってきたよ。

いったいSFは、科学的でなければならぬのか？
科学的でなくてもいいのか？

もしSFが、科学的でなくてもいいとすると、SFはサイエンス・フィクションの略だ などということは、いえなくなってしまうのではないか。

すると、SFということばは変えなくちゃいけないということにならないか？

まったくだ。ほんとうは変えたほうがいいのかもしいね。だけど、ちょっと待ってくれ。

せっかく、これほどまでに、SFということばがひろまったんだ。いまさら変えるのは、おしいような気がするし、そのうえややくしくならないか？

SFならSFでいいじゃないか。

SFがサイエンス・フィクションの略ではないということに、してしまえばいいのだ。

「SFとは、SとFの文字と、FとFの文字と、そのふたつの字であらわされる、読みものごとである。」

これでいいじゃないか。

あまりにおもしろいので全部引用してしまいそうになるが、このへんでとめる。私は小学生のときに筒井さんのこの文章に触れて、なるほどそういうものか、とすり込みをされたせいで、SFに科学は必要かどうかという最近の議論が理解できない。そんなことは、少なくとも自分のなかでは、三十年も前に結論が出ているからだ。つまり、「科学は必要ない」。もちろん、「SFとは科学空想小説だから、科学とか宇宙のことは絶対に必要である」と考えるひとがいてもかまわない（むしろより、そのほうが遙かに多数派だろうと思う）。それこそ筒井康隆のいう「百人いれば百とおりのSF観がある」ということであり、SF読みの状態として健全だということだ。

私は今回この本を読み返して、筒井さんの序文に深く影響されていることを再確認した。私はずっと、SFと科学は関係ない、という思いのもとにSFを読んできたが、今考えると、それはこの序文のせいなのだろうな。あと、日本SFとというのは独自の発展を遂げてきたジャンルだが、星新一、筒井康隆、眉村卓、半村良……とこう並べたてるだけでも、科学知識を全面にだした作家は少ない。日本SFというのは、かなり「おかしい」のである。石原藤夫、堀晃、野尻抱介……といったハードSFの専門家や、菅浩江のような少数の特例はべつとして、アメリカやイギリスのSFとはまるで違った発展を遂げてしまったのが日本のSFなのである。私が、

SFと科学は関係ない、と思っているのは、たぶん、日本SFのそういう状態になじんでしまったせいもあると思われる。だって「おーい、でてこーい」とか「俗物図鑑」とか「石の血脈」とか「白き日旅立てば不死」とか……そんなものが「ごく普通のSF」と思っていたのだ。それと、SFマガジンには当時、河野典生の「街の博物誌」（シニカルさとほんわかした感覚の同居したファンタジーで、視点がすごくシニールで、めっちゃめっちゃ好きだった）とか鈴木いずみ（逆立ちしてもSFとは呼びにくい作品が多かったが、めっちゃめっちゃ好きだった）の短編とか山尾悠子（説明はいりませんね）の短編などが掲載されており、そういうのも全部SFと真ん中だと思ってたし、ラブクラフトとかクトゥルー系の小説も載ってて、そんなのもSFだと思ってた（クトゥルーは宇宙から来たわけだから、SFといえんことはないわな）。なにしろ「SFマガジン」に載ってるのだから、SFにまちがいない。そう思ってたのである。そんな読書経験を経た人間が、科学なんかSFに何の関係があるの？ という風に育ったとしても、本人をせめることはできないのではないか。

しかし、筒井さんの序文のようじ、

「SFとは、S FとF Sと、F SとS Fと、そのふたつの字であらわされる、読みものことである。」

と言いだすと、あれもSF、これもSFといふことになり、「おもしろいものはぜーんぶSF」といふことになりかねない（実際、一時はそういう風潮があったと思う。SFブームの頃ね）。そのうえ、「いや、おもしろくないものもSFだ」と言いだすと、「あらゆる小説はSFである」といふことになってしまい、ジャンルとか定義というものが意味がなくなる。ある個人が「これはおもしろい」と思ったならそれがSFなのだ、ということになってしまっからだ。最近、ミステリーのほ

うでそんなことを言ってるみたいである。おもろいものは全部ミステリーに入れてしまう。まあ、そのときそのときに勢いのあるジャンルのひとがそんなこと言いだすんだよなあ……。

というところで、今回は「SF教室」の筒井さんによる序文の話に終始してしまっただが、今回はこの本の凄さをご紹介しながら、SFの歴史を漠然と語ってみたい。では次号。

(了)